鷹部屋福平「毛民青屋集」に基づいた 1940年の二風谷村アイヌ集落に見られた建築物の実態

ACTUAL CONDITIONS OF ARCHITECTURAL STRUCTURES OF AINU SETTLEMENT AT NIBUTANI IN 1940, BASED ON "COLLECTION OF THATCHED-ROOF HOUSES OF THE AINUS"
BY FUKUHEI TAKABEYA

佐久間 学*, 羽 深 久 夫**
Manabu SAKUMA and Hisao HABUKA

The Ainu settlement at Nibutani in 1940 was confirmed to have had at least 35 ethnic Ainu houses and at least three ethnic Japanese houses. The architectural buildings are categorized into four types: "thatched-wall thatched-roof hipped-roof architectural structure" (Type A), "spindle-wall thatched-roof hipped-roof architectural structure" (Type B), "thatched-roof gable-roof architectural structure" (Type C), and "roof-shingle or tin-roof architectural structure" (Type D). Many ethnic Ainu people lived in Type B architectural structures, using architectural structures of Type A or Type C as barns or stables. Type D modified residential housing is considered to have become more prevalent only after 1940.

Keywords : *Ainu people, Houses(Chise), Settlement(Kotan), Nibutani, Exterior*
アイヌ民族, 住居 (チセ), 集落 (コタン), 二風谷, 外観

1. はじめに

(1) 先行研究について

アイヌ民族の建築に関する研究は1920年代にアイヌ民族の建築物の現地調査の報告^{注1)}により始まり、主要な研究は1930年代後半から1940年代前半にかけて行われた。特に鷹部屋氏の研究^{注2)}と棚橋諒氏の研究^{注3)}はアイヌ民族の建築に関する研究の礎となった。その後、建築学の他、言語学や文化人類学や地理学を専門とした研究者による研究も行われたが、建築物に関する考察は鷹部屋氏と棚橋氏の論考の再録にとどまっている^{注4)}。近年の研究には2008年の小林孝二氏^{注5)}の研究があり、発掘報告書^{注6)}と絵画資料^{注7)}を基に、アイヌ文化成立期(13世紀前後)から近世紀末(19世紀後半)までのアイヌ民族の建築物の特徴を明らかにしている。1920年代から行われてきた研究の背景には、伝統的なアイヌ民族の建築物^{注8)}が激減していた事があり、研究の内容はアイヌ民族の建築物の起源に関する考察^{注9)}に主眼がおかれ、研究対象年代を特定して各時代のアイヌ民族の建築物の特徴を考察した研究は小林氏の研究まで見られなかった。

(2) 研究の課題と意義

小林氏の研究によりアイヌ民族の建築に関する研究の課題は、研究対象年代を特定し、各時代のアイヌ民族の建築物の特徴を明らかにした上で、通史としてアイヌ民族の建築物の変遷を見る事である。研究対象年代で見ると、主要な研究が行われた1930年代後半から

1940年代前半においても課題が残されている。鷹部屋氏は、1938年以降、北海道各地に所在したアイヌ民族の集落の現地調査を行い、1940年に行った二風谷村アイヌ集落(図1)について、建築物の写真と平面図の記録を「毛民青屋集」^{注10)}5～6に収めている。鷹部屋氏は、毛民青屋集について「既に民族色は稀薄であるけれども、現状保存の目的をもって余は全村アイヌ民家を記録し後日に残すべき資料を作製した」と述べている^{注11)}。「毛民青屋集」5～6には、茅壁茅葺屋根の寄棟建築物(図2)といった伝統的なアイヌ民族の建築物だけではなく、マサ壁やガラス窓を設置した建築物(図3)

図1 二風谷の位置図

* 札幌市立大学大学院デザイン研究科
博士後期課程・修士(デザイン学)

** 札幌市立大学大学院デザイン研究科 教授・博士(工学)

Graduate Student, Graduate School of Design, Sapporo City University, M. Des.

Prof., Graduate School of Design, Sapporo City University, Dr. Eng.

図2 茅壁茅葺屋根の寄棟建築物

図3 マサ壁・ガラス窓を設置した建築物

図4 葺葺又はトタン屋根の建築物（写真右）

や葺葺屋根又はトタン屋根の建築物（図4）といった改良型のアイヌ民族の建築物^{注12)}を収録している。しかし、研究においては、アイヌ民族の建築物の起源に関する研究が主眼にあるため、伝統的なアイヌ民族の建築物が研究対象となっていた。アイヌ民族の建築物を通史で見る際、当時のアイヌ民族の建築物の実態として、伝統的なアイヌ民族の建築物と改良型の建築物がどのように顕在し、それらの類似性や差異性を明らかにする事は、重要な意義がある。

「毛民青屋集」5～6は集落単位で写真と平面図が収録され、建築物の用途も記載されている事から、集落内の建築物の外観や用途別の比較や、平面図を用いて平面規模を明らかにする事ができる。鷹部屋氏の二風谷村アイヌ集落に関する研究^{注13)}を見ると、二風谷村アイヌ集落内の建築物を比較した研究は見られなく、また、平面図を残しているがそれらを用いた研究も行われていない。鷹部屋氏以外の研究^{注14)}を見ても、断片的な調査報告にとどまり、考察は行われていない状況である。

(3) 研究の目的と方法

研究の課題と意義をふまえ、本研究は、1940年の二風谷村アイヌ集落の建築物の実態を明らかにするため、伝統的なアイヌ民族の建築物だけではなく、これまで研究対象とされなかった改良型のアイヌ民族の建築物を研究対象とし、1940年の二風谷村アイヌ集落の建築物の配置状況や建築物の外観形状の特徴及び平面規模の特徴を明らかにする事を目的とする。

研究の手順は、最初に「毛民青屋集」5～6を古地図や航空写真を基に検証し、建築物の居住者名と立地場所の特定を行う。特定した建築物は、人名表へのアイヌ人名の記載の有無、平面図の添付の有無、建築用途の有無により、4種類（建築物a～d）に分類する（表1）。次に、二風谷村アイヌ集落の建築物である「建築物a～d」を用いて、二風谷村アイヌ集落の建築物の配置状況、二風谷村アイヌ集落の居住者の建築物である「建築物a～c」を用いて、二風谷村アイヌ集落の建築物の類型化を行う。最後にアイヌ民族の建築と断定できる「建築物a」及び「建築物b」を用いて、類型化した建築物の用途と平面形と外観の特徴、平面図が付属する「建築物a」を用いて、類型化した建築物の平面図から見た平面規模の特徴を明らかにする。

2. 資料について

(1) 「毛民青屋集」5～6

「毛民青屋集」5～6は、調査票100枚、人名表1枚、絵画2枚からなる。調査票は、建築物の外観写真、中央に写る建築物の居住者名、寸法・窓・入口・方角・居住者名が記載された平面図からな

表1 記載内容による建築物の分類

	立地場所	写真	平面図	用途	人名表
建築物a	●	●	●	●	●
建築物b	●	●	×	●	●
建築物c	●	●	×	×	×
建築物d	アイヌ民族以外の建築物、学校、診療所等				

る。人名表は、簡易地図にアイヌ居住者名35名、和人居住者名3名、マンロー氏の診療所^{注15)}を記載している。絵画2枚は、アイヌ語の建築部材名と家屋小屋組構造を描いている。

調査票は、写真の建築物と居住者名の不一致、人名表に記載のない建築物が写真に写る等があるため、資料の検証を行い、建築物の居住者名と立地場所を特定する必要がある。

鷹部屋氏の二風谷村に関する本調査と研究について、1939年の二風谷村の戸口調査^{注16)}によると、和人が60戸口、アイヌ民族が47戸口とある。鷹部屋氏の調査から分かるアイヌ民族の戸口数は、人名表及び写真に記載のある35名（戸口）であり、「毛民青屋集」5～6は、最低でも7割以上のアイヌ民族の戸口を収録している。

(2) その他の資料

本研究は、以下の資料を用い、建築物の配置関係から、「毛民青屋集」5～6の検証を行う。

①「沙流郡平取村大字二風谷村土地連絡図^{注17)}」（以下、連絡図）

連絡図は、1929年に作製された、二風谷村全土の「原」、「畑」、「宅」、「未開地」、「道路」、「川」といった土地区画と土地面積が記入された実測図であり、現在収集可能な資料の中で最も1940年に近い年の土地状況図である。

②「日高国沙流郡二風谷村旧土人給与地図」（以下、給与地図）

給与地図は、鷹部屋氏の報告書^{注18)}の中に、1897年時の鷹部屋氏の調査地における簡易の給与地図にアイヌ人名が記入されてる資料として掲載されている。1940年において、姓は、1897年時と大きく変わらず、人名表の人名配列と共通性がある。

③「国土地理院所蔵航空写真^{注19)}」（以下、航空写真）

1936年及び1944年撮影の航空写真は、現在国土地理院が所蔵する入手可能な二風谷村を写す航空写真の中、鷹部屋氏が調査した1940年に最も近い状況を写し込んでおり、建築物が存在した場所の把握ができる。

3. 資料の検証

(1) 建築物の居住者名と立地場所の特定

1940年当時の建築物の配置状況が分かる連絡図、給与地図、航

空写真を用い、建築物の居住者名と立地場所を特定する。建築物の居住者名と立地場所の特定の際、人名表へのアイヌ人名の記載の有無、平面図の添付の有無、建築用途の有無という記載内容が異なることから、各建築物を以下の4つに分類した(表1)。

①「写真と平面図が存在し、建築用途が分かり、人名表にアイヌ人名が記載されている建築物」(以下、建築物a)

人名表にアイヌ人名が記載されていることからアイヌ民族の建築物で、写真による外観的特徴の分析、平面図による平面規模の分析、位置の特定が可能な建築物である。

②「平面図はなく写真が存在し、建築用途が分かり、人名表にアイヌ人名が記載されている建築物」(以下、建築物b)

人名表にアイヌ人名が記載されていることからアイヌ民族の建築物であり、写真による外観的特徴の分析、位置の特定が可能な建築物である。

③「平面図はなく写真が存在し、建築用途が不明で、人名表に記載のない建築物」(以下、建築物c)

人名表に記載が無いからアイヌ民族の建築物か和人の建築物か特定できなく、また、写真端に小さく写り込む程度で外観的特徴を抽

出しにくい、位置の特定が可能な建築物である。

④「その他の建築物」(以下、建築物d)

アイヌ民族以外の建築物や学校等、当時の状況を把握できる建築物である。

資料の検証から、「建築物a」が36件、「建築物b」が10件、「建築物c」が30件、「建築物d」がアイヌ民族以外の建築物が3件と二風谷小学校、診療所、鳥居、米つき機^{注20)}、水飲み場が確認できた。

(2) 位置図と配置図の作製

調査票の内容は、表2にまとめ、各建築物の位置図(図5)と配置図(図6)を作製し、資料の信頼性を裏付けた。

表記方法は、「建築物a」を「□」、「建築物b」を「■」、「建築物c」を「▲」、「建築物d」を「●」とした。「建築物a」及び「建築物b」の人名表に記載のある建築物について、アイヌ民族の所有者名は「01～35」の数字番号、和人所有者名は「A's～C's」の大文字アルファベット順で表記し、建築物は住居を「H」、物置を「Se」、厩舎を「St」、空家を「VH」と表記した。「建築物c」の名称は、「a～z、aa～ad」の小文字アルファベットで表記し、「建築物d」の名称については、二風谷小学校「● elementary school」のように表記した。

表2 「毛民青屋集」5～6の検証結果

調査票番号	平面図添付	調査票内容※1	調査票番号	平面図添付	調査票内容※1・注記
1n	□01H	□01H: ▲c ▲b	43n	□22H:	
2n	□02H	□03H: □02H: □01H:	44n	□32H: ▲z ▲ac	
3n		□05H: □04H: ■05Se: □02H: □03H: □01H:	45n	□32H	□32H: ●B's H (写真背面)
4n	□03H □04H	□04H: □03H	46n		●C's H:
5n	□12H	■12St:	47n		●C's H:
6n	□14H	□14H: ■14Se:	48n		●tori: ▲m
7n		●14 drinking fountain:	49n		▲o: ▲m
8n	□13H	□14H: ■14Se: □13H:	50n		▲ad
9n	□15H	■15VH: □15H: ▲h: □14H: ■14Se:	51n		▲i: ■15VH: ■16St:
10n		□16H: ■15VH: □15H:	52n	□07H	□10H: ■09H: ■08H: □07H: ■05Se: □06St: ■11H:
11n		■16St: □16H: ■15VH: □15H:	53n	□10H	■10Se: □09Se: □10H: □09H: ■08H: □07H:
12n		■16St:	54n		■12S: □12H:
13n		■16St:	55n	□09Se	□10H: ■10Se: □09Se: □09H:
14n		■16St:	56n		□05H: □03H: ■05Se:
14(a)n		■16St:	57n	□06St	□05H: ■05Se: □06St:
15n	□16H	▲i: □16H: ■16St: ■15VH:	58n		■05Se: □06St:
16n		■17H: ▲k: ▲j:	59n		■05Se: □06St:
17n	□18H	□18H: ■17H: ●prischool	60n		□06St:
18n	□19H	□19H:	61n		□03H: □04H:
19n		□19H: ■17H: □18H:	62n		■05Se: □06St: □05H: □03H:
20n		□19H:	63n		▲f: ▲d: ▲e: □06St: ■05Se: □07H: □05H: □03H:
21n		□20H: □19H: ▲l	64n		▲e: □06St: ■05Se: □07H: □05H: □03H: □04H:
22n	□20H	□21H: □20H: □19H:	65n		□06St: ■05Se: □07H: □05H: □03H: □04H:
23n		□21H: □20H: □19H:	66n		□05H: □03H: □04H:
24n		●A's H:	67n		□02H: □01H:
番号無※2		□23H: □23Se: ●A's H:	68n		■15VH: ■16St: □15H: □14H:
25n	□23H	□23Se:	69n		■15VH: ■16St: □14H: ▲H: □13H:
26n	□23Se	▲p: □23Se: □28H: □27H: □26H: ▲r: □24H:	70n		▲q: ▲u: ▲p: ▲s: □25S: ▲r: ▲t: □24H: □23Se: □23H
27n	□24H	□24H:	71n	□21H	□19H: □20H: □21H:
27(a)n1※3		□24H:	72n	□31H	●B's H: □31H:
27(a)n2※3		□24H:	73n		▲d: ▲e: ▲q: □06St: □12H: □07H: ■05Se:
28n		□23Se: ▲s: ▲u: ▲v	74n		□01H: ▲c: ▲b
29n		□26H:	75n		■05Se: □03H: □01H: ▲c: ▲b: ▲a
30n		□26H: ▲r: □24H: □23H: □23Se:	76n		□05H: □04H: ■05Se: □02H: □03H: □01H: ▲c: ▲b
31n	□25St	□25St: ▲s	77n		▲q: □06St: □12H: □07H: ■05Se: □05H:
31(a)n		□23Se: □25St: ▲s	78n		□04H: □03H: □02H:
31(b)n		□23Se: □25St: ▲p: ▲s	79n	□05H	□07H: ■05Se: □05H:
32n		□25St: ▲p: ●B's H: ▲s	80n		▲o: ▲n: ▲m: ●tori:
33n	□27H	▲t: □27H: □26H: ▲r: □24H: □23H:	81n		▲q: □25S: □24H: □23H:
34n		□28H: □27H: ▲w: □26H:	82n		□24H: □23H: □23Se:
35n		□29H: ▲x: ▲y: □28H: □27H: ▲z	83n	□26H	▲v: ▲u: □26H: ▲r
36n	□28H □30St □30Se	□30St: □30Se: ▲z: □33Se:	84n		□25St: ▲p: □23H: □23Se: ▲q
37n	□29H	□29H: ▲x: ▲w: ▲y: □28H: □27H:	85※4		●elementary school:
38n	□33Se	▲ab: □33Se: □29H: ▲x: ▲w: ▲y: □28H:	86※4		●rice mill machine
39n	□34H □34Se	□34H: □34Se: ▲ac: □33Se: □29H: ▲x: ▲w: ▲y: □28H:	87※4		●rice mill machine
40n	□35H □35Se	□35H:	88※4		▲n: ▲m: ●tori: □21H: □20H: □19H:
41n		□35Se: □35H:	89※4		▲n:
42n	□22H	□22H:	90※4		▲n: ▲m: ●tori: □21H:
			91※4		●B's H:
			92※4		□24H: □23Se: □23H: ●A's H:
			93※4		●B's H:
			94※4		●B's H:

※1 資料内容は、写真に写る建築物を左から表記したものである。 ※2 資料番号「24n」と「25n」の間に、資料番号のない「無番号」があり、その写真をさす。 ※3 資料番号「27n」と「28n」の間に、同一資料番号「27(a)n」が2枚あり、資料を分けるため順番に「27(a)n1」「27(a)n2」とした。 ※4 資料番号「85」～「94」は、鉛筆で薄く番号が記されている。

図5 位置図

図6 配置図(□23H周辺)

(3) 集落の建築物の配置状況

位置図から集落の状況を見ると、集落は沙流川沿いにあり、現在の国道237号の東側に密集して建築物が建造され、アイヌ民族と和人が共にアイヌ集落内で生活をしていた。建築物の周りは畑であり、アイヌ民族は農家として生計を立てていた^{注21)}。道路の西側には、二風谷小学校、マンロー氏の診療所がある。

鷹部屋氏が調査した36件の建築物(建築物a)の配置を見ると、主屋長軸が南北軸である建築物は36件の内31件(件数比86.1%)と大半を占め、また、建築物の入口は36件の内26件(件数比72.2%)が道路に面していた(図6を参照)。道路の東に位置する建築物は、主屋長軸が南北軸で西側に入口を持つ平入の建築物となる傾向が見られた(□14Hの建築物は、南側に入口を持つ妻入の建築物となっている)。

納屋の役割をはたす高床倉庫(プー)は、1940年の二風谷村には確認できず、住居と同様の平地式の建築物を納屋として利用している。また、イナウ(祭壇)や熊檻も確認できない。

4. 二風谷村の建築物の類型化

本章では、資料の検証において、アイヌ民族の建築物である「建築物a」及び「建築物b」、アイヌ民族の建築物か和人の建築物である「建築物c」を基に、建築物の類型化を行う。

鷹部屋氏は、1940年当時の二風谷村の建築物について、「本村の民家は和人家屋とアイヌ家屋の二種類であって、前者は桁葺又はトタン葺であり、後者の多くはアイヌ家独特な段々茅葺のことが多い」と記している^{注22)}。

鷹部屋氏が記すアイヌ家屋は、主に寄棟屋根の建築物であるが、1940年の状況として茅壁だけではなく一部改良と考えられるマサ壁の住居が存在することから壁材の違いで寄棟屋根の

建築物を2つに分類し、また、件数は少ないが切妻屋根の建築物が存在することから、寄棟屋根とは別に切妻屋根の建築物を1分類し、計3つに類型化した。鷹部屋氏が記す和人家屋は、アイヌ民族において改良住宅として1分類し、計4つに建築物を類型化した(図7)。

以下に、各類型の特徴と件数比(表3、図8)を記す。

①「茅壁茅葺屋根の寄棟建築物」(以下、類型A)

類型Aは、アイヌ民族の伝統的な建築物の形態であるが、「建築物a」と「建築物b」の合計の件数は11件(件数比23.9%)、「建築物c」の件数は3件(件数比10.0%)であり、1940年の二風谷村アイヌ集落では、件数の多い建築物ではなかったと考えられる。

②「マサ壁茅葺屋根の寄棟建築物」(以下、類型B)

類型Bは、類型Aの屋根形状・屋根材で、壁がマサ壁である建築物であり、「建築物a」と「建築物b」の合計の件数は29件(件数比63.1%)、「建築物c」の件数は12件(件数比40.0%)であるこ

類型 A

類型 B

類型 C

類型 D

図 7 建築物の類型

とから、最も件数の多い建築物であったと考えられる。

③「茅葺屋根の切妻建築物」(以下、類型 C)

類型 C は、切妻屋根の建築物であるが、アイヌ民族の建築物を描いた絵画資料^{注23)}や写真資料^{注24)}に見受けられ、アイヌ民族の建築物の形態の1つであり、「建築物 a」と「建築物 b」の合計の件数は3件(件数比6.5%)、「建築物 c」の件数は2件(件数比6.7%)と件数は少ない。

④「葦葺屋根又はトタン屋根の建築物」(以下、類型 D)

類型 D は、茅葺材を用いていない葦葺屋根又はトタン屋根の建築物であり、アイヌ民族においては、1937年の北海道旧土人保護法の一部を改正し、アイヌ民族に対して住宅改良のための資金を支給する制度が定められ、その基準として制定された建築物と同等のものである。「建築物 a」と「建築物 b」の合計の件数は3件(件数比6.5%)、「建築物 c」の件数は13件(件数比43.3%)であり、集落内には多く存在したが、アイヌ民族においては、類型 B ほど多くなく、1940年以後に増加したと考えられる。

5. 類型化した建築物の用途と平面形と外観形状から見た特徴

資料の検証において分類した建築用途が分かりアイヌ民族の建築物である「建築物 a」36件、「建築物 b」10件の計46件の建築物に対し、二風谷村アイヌ集落で確認できた平面形(図9)、用途及び平面形別の件数(表4)、用途別件数比(図10)、外観の特徴から各類型の特徴を明らかにした。なお、平面形は、主屋とセム^{注25)}の接続位置により分類した。

①類型 A「茅葺茅葺屋根の寄棟建築物」

類型 A は11件あり、平面形は全て平面形 i の平入である。用途別件数を見ると、住居が4件(件数比36.4%)、納屋が5件(件数比45.4%)、厩舎が2件(件数比18.2%)であり、用途は多岐にわたる。外観意匠の特徴として、住居と住居以外の建築物を比べると、住居の壁は、住居以外の建築物の壁より、茅が密に葺かれており、開口部を見ると、住居には全て壁に窓があるが、住居以外の建築物には窓の無いものが多く、入口は戸がない傾向にある(図11)。

②類型 B「葦葺茅葺屋根の寄棟建築物」

類型 B は29件あり、平面形を見ると、平面形 i は、平入の住居が13件、妻入の住居が3件、住居以外では平入3件と入口が不明なものが1件である。平面形 ii は、セムの屋根形状が片流れ屋根であり、平入の住居が4件である。平面形 iii は、セムの屋根形状が片流れ屋根であり、平入の住居が4件、妻入の建住居が1件である。以上のことから、類型 B の平面形は、平面形 i の平入が大半を占め、また、セムを伴う平面形 ii 及び平面形 iii の建築物は、全て住居の用途である。用途別件数を見ると、住居が25件(件数比86.2%)、

表 3 建築物の件数(建築物 a～c)

	類型A	類型B	類型C	類型D
建築物a	9件	24件	3件	0件
建築物b	2件	5件	0件	3件
建築物c	3件	12件	2件	13件

図 8 建築物の件数比

図 9 平面形

表 4 用途及び平面形別の建築物の件数(建築物 a と建築物 b)

類型	用途	平面形 i		平面形 ii	平面形 iii	
		平入	妻入	平入	平入	妻入
A	住居・空家	4件	0件	0件	0件	0件
	納屋	5件	0件	0件	0件	0件
	厩舎	2件	0件	0件	0件	0件
B	住居・空家	13件	3件	4件	4件	1件
	納屋	平入1件、不明1件		0件	0件	0件
	厩舎	2件	0件	0件	0件	0件
C	住居・空家	0件	0件	0件	0件	0件
	納屋	平入1件、不明1件		0件	0件	0件
	厩舎	0件	1件	0件	0件	0件
D	住居・空家	不明3件		0件	0件	0件
	納屋	0件	0件	0件	0件	0件
	厩舎	0件	0件	0件	0件	0件

図 10 用途別で見た建築物の件数比(建築物 a と建築物 b)

納屋が2件（件数比6.9%）、厩舎が2件（件数比6.9%）であり、用途は主に住居として用いられている。外観の特徴は、開口部にガラス窓や板戸（ガラス入りの板戸も有）を設置している。

③類型C「茅葺屋根の切妻建築物」

類型Cは3件あり、平面形は全て平面形iであり、平入が1件、妻入の建築物が1件、入口が不明な建築物が1件である。用途別件数を見ると、納屋が2件（件数比66.7%）、厩舎が1件（件数比33.3%）であり、全て住居以外の用途である。外観の特徴として、壁は、茅壁が2件、マサ壁が1件が確認できる。

④類型D「桁葺屋根又はトタン屋根の建築物」

類型Dは、写真に全形が写り込まず入口位置等が不明であるが、3件あり、用途は全て住居である。屋根形状は寄棟屋根1件と切妻屋根2件が確認できる。

二風谷村におけるアイヌ民族の建築物は、類型Bでみられるように、屋根構造はそのままで、壁を茅壁からマサ壁、ガラス窓や板戸に改良する建築物が多く、類型Dの改良住宅は、1940年には普及していなかった。

6. 類型化した建築物の平面図から見た特徴

資料の検証において分類した平面図が付属する「建築物a」36件に対し、平面規模から分析を行った。表5は、36件の建築物を主屋の長辺（間）、主屋の短辺（間）、主屋の面積（坪）、セムの面積（坪）、セム以外の主屋に付属する室の面積（坪）、合計面積（坪）でまとめたものである。

主屋の長辺と短辺の組み合わせは、11通り確認でき、長辺が4間で短辺が3間の組み合わせが36件のうち14件（件数比38.9%）で多く、その他はいずれも1～4件程度とばらつきがあり、主屋の平面規模は、類型A～類型Cまで大きな差異は見られない（表6）。類型Dに関しては、鷹部屋氏の平面図の記録がない。

用途別で見ると、住居は27件あり、その内、長辺が4間で短辺が3間以上の主屋平面が19件（住居の70.4%）と多く、合計面積の平均は14.4坪（主屋の面積の平均は12.2坪）である。納屋や厩舎の住居以外の建築物は9件あり、その内、長辺が4間で短辺が3間未満の主屋平面が6件（住居以外の建築物の66.7%）と多く、主屋の面積の平均は8.6坪であり、住居の主屋の面積より小さい。

以下に各類型の平面規模を記す。

①類型A「茅壁茅葺屋根の寄棟建築物」

主屋面積は、長辺が3間で短辺が2間の6坪から、長辺が4間で短辺が3間の12坪まで存在する。類型Aだけを見ると、住居と住居以外の建築物に大きな違いは見られない。

②類型B「桁葺茅葺屋根の寄棟建築物」

主屋面積は、長辺が3間で短辺が2間の6坪から、長辺が5間で短辺が4間の20坪まで存在する。セムの面積は、平面形iiが2～5坪、平面形iiiが7～9坪まで存在する。

セムを伴う建築物は、セムを伴わない建築物よりセムの面積の分、合計面積も大きくなるが、主屋面積を見ても、長辺が5間で短辺が3～4間の建築物が5件（セムを伴う建築物7件の71.4%）と多く、セムを伴わない建築物より主屋平面が大きい。

③類型C「茅葺屋根の切妻建築物」

主屋面積は、長辺が2間で短辺が2間の4坪から、長辺が4間

図11 類型Aの住居（左）と住居以外（右）の建築物の比較

表5 類型別の平面規模（建築物a）

類型	用途	建築物	主屋 長辺(間)	主屋 短辺(間)	主屋 面積(坪)	セム 面積(坪)	その他 面積(坪)	合計 面積(坪)
A	住居	□02H	4	3	12			12
		□19H	4	3	12			12
		□24H	3	2.5	7.5		2.5	10
		□01H	3	2	6			6
	納屋	□33Se	4	3	12			12
		□35Se	3.5	2.5	8.75			8.75
		□23Se	3	2	6			6
		□34Se	3	2	6			6
	厩舎	□06St	4	3	12			12
B	住居	□10H	5	4	20			20
		□12H	5	4	20	5	1.25	26.25
		□35H	5	4	20	3		23
		□15H	5	3	15	9		24
		□23H	5	3	15	8		23
		□26H	5	3	15	7	8.25	30.25
		□29H	4.5	3	13.5			13.5
		□32H	4.5	3	13.5			13.5
		□04H	4	3	12			12
		□05H	4	3	12			12
		□13H	4	3	12			12
		□16H	4	3	12	8		20
		□18H	4	3	12			12
		□20H	4	3	12	2		14
		□21H	4	3	12			12
		□27H	4	3	12			12
		□28H	4	3	12			12
		□34H	4	2.5	10			10
		□07H	4	2.5	10			10
		□31H	3	3	9		3.5	12.5
C	納屋	□22H	3.5	2.5	8.75		2	10.75
		□03H	3	2.5	7.5			7.5
		□14H	3	2.5	7.5			7.5
		□25St	3	2	6			6
		□09Se	3.5	3	10.5			10.5
		□30Se	2	2	4			4
		□30St	4	3	12			12

表6 主屋の長辺と短辺の組合せ件数
(短辺)

	2間	2.5間	3間	4間
2間	1件			
3間	4件	3件	1件	
3.5間		2件	1件	
4間		2件	14件	
4.5間			2件	
5間			3件	3件

で短辺が3間の12坪まで存在する。

④類型D「桁葺屋根又はトタン屋根の建築物」

類型Dに関しては、平面図の添付が無いが、1937年の住宅改良標準設計図^{注26)}と同等であったとすると、主屋面積は、15坪前後を標準としており、他の類型と大きな違いがなかったことが窺える。

7. 結論

本研究は、「毛民青屋集」5～6を基にして、伝統的なアイヌ民族の建築物だけではなく、これまで研究対象とされなかった改良型のアイヌ民族の建築物も研究対象とし、連絡図、給与地図、航空写

真を検討する事により、1940年の二風谷村アイヌ集落の建築物の配置状況、二風谷村アイヌ集落の建築物の外観の特徴、二風谷村アイヌ集落の平面規模の特徴を明らかにした。

二風谷村アイヌ集落の建築物の配置状況：鷹部屋氏が調査した1940年の二風谷村アイヌ集落は、現在の国道237号の沙流川沿いにあり、二風谷村で生活をするアイヌ民族47戸の内35戸以上が生活をしていた。集落内には、二風谷小学校やマンロー氏の診療所があり、和人も3戸以上が確認でき、アイヌ民族と和人がともに生活をしていた。建築物の配置を見ると、主屋長軸が南北軸である建築物は36件の内31件（件数比86.1%）と大半を占め、建築物の入口は36件の内26件（件数比72.2%）が道路に面して建てられていた。納屋の役割をはたす高床倉庫（プー）は、1940年の二風谷村には確認できず、住居と同様の平地式の寄棟建築物と切妻建築物を納屋として利用していた。

二風谷村アイヌ集落の建築物の外観の特徴：二風谷村アイヌ集落の建築物は、その外観形状から大きく「茅壁茅葺屋根の寄棟建築物（類型A）」、「桁壁茅葺屋根の寄棟建築物（類型B）」、「茅葺屋根の切妻建築（類型C）」、「桁葺屋根又はトタン屋根の建築物（類型D）」の4つに分類される。1940年当時において伝統的と考えられていた類型Aの建築物は、用途は住居、納屋、厩舎と多岐にわたり、平面形は全てセムを伴っていなかった。用途別に見ると、住居の壁は住居以外の建築物の壁より茅が密に葺かれており、また、住居には全て壁に窓があるのに対して住居以外の建築物には窓の無いものが多く、入口に戸がない傾向にあった。アイヌ民族の多くは、類型Bの建築物を住居として用いており、開口部にガラス窓や板戸を設置し、片流れ屋根のセムを接続する住居も見られた。類型Cの建築物は、件数が少なく、納屋や厩舎として用いられ、壁は茅壁とマサ壁を確認できた。類型Dの建築物は、和人が住んでいた建築物であるが、アイヌ民族においても1937年以降、改良住居として住むことが提唱されていた。しかし、二風谷村においては、類型Bでみられるように、屋根構造はそのまま、壁を茅壁からマサ壁、ガラス窓や板戸に改良する建築物に住むアイヌ民族が多く、類型Dの改良住宅は、1940年にはまだ普及していなかった。

二風谷村アイヌ集落の建築物の平面規模の特徴：平面図から二風谷村アイヌ集落の建築物の平面規模の特徴について見ると、類型化別では平面規模に大きな違いは見られないが、主屋の長辺と短辺の組み合わせ、用途別の主屋面積、セムの有無による主屋面積の3つに平面規模の特徴が見られた。主屋の長辺と短辺の組み合わせは、11通りと多岐にわたるが、長辺が4間で短辺が3間の組み合わせが36件のうち14件（38.9%）と多い。用途別の主屋面積について見ると、住居は27件あり、その内、長辺が4間で短辺が3間以上の主屋平面が19件（住居の70.4%）と多く、主屋面積の平均は12.2坪である。一方、納屋や厩舎の住居以外の建築物は9件あり、その内、長辺が4間で短辺が3間未満の主屋平面が6件（住居以外の建築物の66.7%）と多く、主屋面積の平均は8.6坪であり、住居の主屋面積より小さい。セムの有無による主屋平面について見ると、セムを伴う建築物は7件あり、その内、長辺が5間で短辺が3～4間の主屋平面が5件（セムを伴う建築物の71.4%）と多く、セムを伴わない建築物より主屋平面が大きい。

以上、二風谷村アイヌ集落の建築物の配置状況、建築物の外観の

特徴及び平面規模の特徴から見た、1940年の二風谷村アイヌ集落の建築物の実態は、類型Bの建築物が1940年当時において、住居として多くのアイヌ民族に用いられており、茅壁からマサ壁への壁の変更、ガラス窓の設置が当時の改良住宅であり、類型Dのような改良住宅に住むようになるのは、1940年以降であった。建築物の配置は主屋長軸が南北軸で入口が道路に面する傾向に有り、平面規模は長辺が4間で短辺が3間の主屋が一般的であったが、セムを伴う住居の主屋は長辺が5間で短辺が3～4間であった。伝統的と考えられている類型Aの建築物も見られたが、セムを伴った建築物は見られなかった。用途別に建築物を使い分けていた事も確認でき、特に類型Cの切妻建築物は納屋や厩舎のみの利用であったことが明らかとなった。

注

注1) アイヌ民族の建築についての記述は、江戸時代の間宮林蔵や松浦武四郎等の蝦夷地(樺太も含む)に関する書物や明治期のハインリッヒ・フォン・シーボルトやイザベラ・バード等の旅行記に見られる。建築学の見地からの研究としては、1925年の村上二郎氏の研究報告が最初である。間宮林蔵：北夷分界余話，1811年。松浦武四郎：初航、再航、三航蝦夷日誌，1850年。ハインリッヒ・フォン・シーボルト：小シーボルト蝦夷見聞記，平凡社，1996年。イザベラ・バード：日本奥地紀行，平凡社，2001年。村上二郎：北海道の住家，建築雑誌，第40輯 第485号，1925。

注2) 鷹部屋福平氏は構造力学の研究者・北海道帝国大学工学部教授であり、また、アイヌ民族の建築に関する研究の第一人者である。代表する研究は以下の通りである。鷹部屋福平：アイヌ屋根の研究と其構造原基體について，北方文化研究報告，第一輯，pp.107-161，1939年3月。同：アイヌ住居の研究，北方文化研究報告，第二輯，pp.1-123，1939年10月。同：アイヌ住居の研究 - アイヌ家屋の地方的特性 -，北方文化研究報告，第三輯，pp.209-265，1940年5月。同：アイヌ民族の使用したる計量の単位並びに「音」の名称に関する研究，北方文化研究報告，第四輯，pp.113-135，1941年2月。同：アイヌ住居の研究 - 日高平取方面に於ける地方性 -，北方文化研究報告，第五輯，pp.103-142，1941年7月。同：アイヌの生活文化，アルス，1942年6月。アイヌの住居，彰国社，1943年3月。同：北方圏の家，彰国社，1943年12月。

注3) 棚橋諒氏は鷹部屋氏と同様に構造力学の研究者であり、以下の論文に一連の研究を発表している。棚橋諒：アイヌの住居，民家，民家研究会，第Ⅱ輯12号，1938年12月。同：アイヌの住居（2），民家，民家研究会，第Ⅲ輯1号，1939年1月。同：アイヌの住居（3），民家，民家研究会，第Ⅲ輯2号，1939年2月。

注4) 注1)、注2)、注3)以外の建築学の見地による研究は以下の通りである。石原憲治：日本農民建築の研究，建築雑誌，1932年10月。関野克：鐵山秘書高殿に就いて，考古学会 考古学雑誌，第28巻7号，1938年7月。竹内芳太郎：アイヌの選ぶ住宅（1），民家 民家研究会，第Ⅲ輯 2号，1939年2月。竹内芳太郎：アイヌの選ぶ住宅（2），民家 民家研究会，第Ⅲ輯 3号，1939年3月。杉野謙三：アイヌ部落，満州建築雑誌，1940年。村田治郎：アイヌの家の史的解釈，建築学会大会梗概集，1950年8月。村田治郎：原始住居構造の一つの型，建築雑誌，775号，1951年7月。太田博太郎：古代住居の系統について，建築雑誌，775号，1951年7月。三田克彦：「えつり」と「こまい」- その語源とアイヌ住居の外殻構造 -，日本建築学会論文集，第46号，1953年3月。越野武：北海道の住宅の歴史，寒地建築教材 概論編，1984年。乾尚彦：アイヌの住居，住宅建築 別冊37 北国の住まい，1989年。宮澤智士：日本列島民家史，住まいの学体系 022，1989年7月。遠藤明久：アイヌ住居の構造に影響を与えた松前藩の施策，日本建築学会大会梗概集，1992年9月。小林法道：白老地方の北海道アイヌ建築の平面形，民族建築，112号，1997年。国文学の見地による研究は以下の通りである。金田一京助：アイヌ芸術 木工編，1942年。言語学の見地による研究は以下の通りである。地里真志保：アイヌ住居に関する若干の考察，民族建築学，第14巻第4号，1950年5月。文化人類学の見地による研究は以下の通りである。大林太良：アイヌ家屋の系統に関する一試練 -ketun-ni- について，民族学研究，1956年12月。杉本尚次：日本民家の研究，ミネルヴァ書房，1969年9月。

注5) 小林孝二，大垣直明：近代以前の絵画資料に描かれたアイヌ民族の建築に関する研究，日本建築学会計画系論文集，第608号，pp.127-134，2006年10月。同：アイヌ文化期の平地住居跡に関する基礎的研究 - 発掘資料か

- ら見たアイヌ民族住居の寸法体系に関する考察－, 日本建築学会計画系論文集, 第615号, pp.191-198, 2007年5月.
- 注6) 考古学による発掘調査の成果資料である。建築学の立場から、建物跡の柱穴跡を分析し、アイヌ民族の建築を研究する。代表的な発掘報告書は以下の通りである。千歳市教育委員会：末広遺跡における考古学的調査（上）、1981年。末広遺跡における考古学的調査（下）、1982年。末広遺跡における考古学的調査（続）、1982年。末広遺跡における考古学的調査Ⅳ、1996年。梅川4遺跡における考古学的調査、2002年。ユカンボシC2遺跡・オサツ2遺跡における考古学的調査、2002年。トメト川3遺跡における考古学的調査、2004年。恵庭市教育委員会：カリンバ2遺跡、1987年。ユカンボシE7遺跡、1998年。柏木川13遺跡（Ⅲ）、2005年。平取町遺跡調査会：北海道平取町イルエカシ遺跡、1989年。
- 注7) 近代以前に描かれたアイヌ民族の建築の絵画や踏査記録に所載する挿図である。代表的な絵画資料は以下の通りである。村上島之允：蝦夷島奇観、1799年。谷元旦：蝦夷紀行、1799年。松浦武四郎：校訂蝦夷日誌一遍巻之六誌、1845年。
- 注8) 本研究において、伝統的なアイヌ民族の建築物とは、現在復元されている茅葺屋根の茅壁といった定説的なアイヌ民族の建築物を指す。
- 注9) アイヌ民族の建築物の起源はどの地域、どこに由来するものか、また、どこに影響を与えているかという考察であり、大きく「北方的系統論」と「南方的系統論」に分けられる。
- 〈北方的系統論〉北方文化の特徴があると考える論
- ・石原憲治氏は、アイヌ民族の住居の平面形の特徴と囲炉裏や空間領域のあり方に着目し東北・北陸の民家との同一性を指摘する。
 - ・鷹部屋福平氏は、アイヌ住居の最大の特徴として小屋組のケトゥンニ構造を取り上げ、北方諸民族の持つ構造との類似性を指摘し、アイヌ民族が北方からの移住民族であると考える。
- 〈南方的系統論〉南方文化の特徴があると考える論
- ・棚橋諒氏は、「小屋組が垂木であり、垂木が小屋組である処の構造は、真束を持たぬ合掌から発達する小屋組の原形であって、内地における簡素な農民住居にひろく行われる」とし、調査時点での現存する住居は北方的要素よりは本州以南の農家建築に近い形態と報告する。
 - ・鷹部屋福平氏は、アイヌ住居の祖形はケトゥンニ構造で北方文化の要素が強いと指摘するが、それ以外の小屋組は、本州以南の影響を受けた「変形」であると述べる。
- 注10) 鷹部屋福平氏の私家版写真帖であり、現在、所蔵先の確認できる「毛民青屋集」は5～6（二風谷村）、7～8（白老村）であり、北海道大学付属図書館が所蔵する。人名表及び調査票は個人名が記載されているため論文等への掲載はできない資料となっているが、写真部分のみの掲載は許可されている。なお小林氏の書物（アイヌの建築文化再考－近世絵画と発掘跡からみたチセの原像－, 北海道出版企画センター、2010年2月）によると、「毛民青屋集」は1～12巻まで有ると記されている。北海道大学付属図書館における「毛民青屋集」5～6の目録は以下の通りである。北海道大学北方関係資料総合目録：二風谷村写真帖第1～2冊（折本仕立）／鷹部屋福平（ニブタニムラ シヤシンチョウ ダイ1-2 サツ（オリホン シタテ））、成立年／昭和15年（1940年）、形態／100枚（各7.5×11cm）原、資料注記／鷹部屋福平「毛民青屋集」5～6（二風谷村アイヌ住居の写真集）、請求記号／別・ア 720-Ta（北大北方資料室）、収載目録名／明治大正期北海道写真目録（明治大正期の北海道・目録編）、レコードID／0B030140000000000。なお、以下の論文に「毛民青屋集」5～6の整理を行っている。佐久間学、羽深久夫：1940年の二風谷アイヌ集落を記録した鷹部屋福平の「毛民青屋集5・6」の資料整理, 札幌市立大学研究論文集, 第6巻, 第1号, pp.81-95, 2012年3月。同：鷹部屋福平の「毛民青屋集5・6」に基づいた1940年の二風谷アイヌ集落の建築物ごとの平面と外観の特徴, 札幌市立大学研究論文集, 第6巻, 第1号, pp.97-112, 2012年3月。
- 注11) 鷹部屋福平：アイヌ住居の研究－日高平取方面に於ける地方性－, 北方文化研究報告, 第五輯, pp.103-142, 1941年7月。
- 注12) 1937年（昭和12年）に北海道旧土人保護法の一部を改正し、アイヌ民族に対して住宅改良のための資金を支給する制度が定められ、以後、アイヌ民族建築物の様相は、「マサ壁」の建築物や、「ガラス窓」を設置した建築物が見えだした。本研究ではそのような建築物を改良型のアイヌ民族の建築物と定義する。
- 注13) 注11) と同一の報告書である。
- 注14) 注1)、注3)、注4)、注5) の論文を指す。
- 注15) マンロー博士（ニール・ゴードン・マンロー）は、アイヌの生活風俗研究のために二風谷に移住し、研究のかたわら医者としての奉仕活動に生涯を

- 捧げた。昭和17年の永眠後、住宅兼病院であった建物は記念館として保存され、現在は北海道大学へ寄贈され、北方文化の研究に活用されている。（参考：平取町オフィシャルホームページ。http://www2.town.biratori.hokkaido.jp/biratori/shisetsu/shi_bunka01.html#bunka05）
- 注16) 注11) と同一の報告書である。
- 注17) 北海道立文書館が所蔵する手書地図。資料目録は以下の通りである。沙流郡平取村大字二風谷村土地連絡図：請求記号／A 7-2/1065, 分類／A 7-2 北海道庁_支庁・郡役所, 主務者名／北海道庁浦河支庁, 年次／1929年（昭和4年）、形態／1冊（2cm）40×57cm, 注記／図案総数84枚 手書。
- 注18) 注11) と同一の報告書である。
- 注19) 国土地理院所蔵の航空写真。航空写真注記は以下の通りである。撮影年／1936年11月7日（昭和11年）、撮影実施機関／陸軍、整理番号／913G83, コース番号／C2, 写真番号／59. 撮影年／1944年10月15日（昭和19年）、撮影実施機関／陸軍、整理番号／91ハ, コース番号／C2, 写真番号／16。
- 注20) 米つき機については、所有者及び配置場所を特定できない。
- 注21) 渡辺茂, 河本道編：平取町史, 平取町, 1974年3月。
- 注22) 注11) と同一の報告書である。
- 注23) 1799年成立の谷元旦の『蝦夷紀行』の「居家露柱梁図」に切妻建築の軸組を描いた絵画を確認できる。
- 注24) 北海道大学付属図書館所蔵、1895年（明治28年）撮影、「釧路国阿寒郡セツリ川上流字ピラカアイヌ部落之景」等の写真において、茅葺屋根の切妻建築を確認できる。
- 注25) 主屋は屋根の小屋組下の室を指し、セムはアイヌ語であり、主屋入口に接続する下屋（前室や庇や風除室の機能）を指す。本研究において、セムを伴わない建築物についても、屋根の小屋組下の室を主屋と表記する。なお、本研究において「下屋」ではなくアイヌ語の「セム」を用いている理由としては、主屋入口に接続しない下屋と区別するためであり、また、アイヌ民族の建築物に関する第一人者である鷹部屋氏と棚橋氏の両氏が論文において「セム」というアイヌ語を用いていることから、本研究においても「セム」を用いている。鷹部屋氏の研究は注2) を参照。棚橋氏の研究は注3) を参照。
- 注26) 1937年（昭和12年）に北海道旧土人保護法の一部を改正し、アイヌ民族に対して住宅改良のための資金を支給する制度が定められ、その基準として制定された設計図を指す。河野本道編：対アイヌ政策法規類集, 北海道出版企画センター, 1981年8月。

ACTUAL CONDITIONS OF ARCHITECTURAL STRUCTURES OF AINU SETTLEMENT AT
NIBUTANI IN 1940, BASED ON "COLLECTION OF THATCHED-ROOF HOUSES OF THE AINUS"
BY FUKUHEI TAKABEYA

*Manabu SAKUMA** and *Hisao HABUKA***

* Graduate Student, Graduate School of Design, Sapporo City University, M. Des.

** Prof., Graduate School of Design, Sapporo City University, Dr. Eng.

This research elucidated the actual conditions of the architectural structures of the Ainu settlement at Nibutani in 1940, based on an album of photographs of the Ainu settlement at Nibutani, which was recorded by Fukuhei Takabeya. The settlement was confirmed to have had at least 35 ethnic Ainu houses and at least three ethnic Japanese houses, which indicates that both the Ainu people and the Japanese were living together.

The architectural buildings found at the settlement are categorized into four types based on their external shapes: "thatched-wall thatched-roof hipped-roof architectural structure" (Type A), "spindle-wall thatched-roof hipped-roof architectural structure" (Type B), "thatched-roof gable-roof architectural structure" (Type C), and "roof-shingle or tin-roof architectural structure" (Type D).

Many ethnic Ainus lived in Type B architectural structures, using architectural structures of Type A or Type C as barns or stables. It has been suggested that by 1937, the Ainu people were living in modified residential housing of Type D. However, many of the ethnic Ainus lived in architectural structures in which the roof structures were retained, but the thatched walls were replaced with those made of spindle and further modified with glass pane windows and wooden doors, as observed in Type B. Therefore, Type D modified residential housing is considered to have become more prevalent only after 1940.

(2014年4月9日原稿受理, 2014年9月12日採用決定)